

リレー・フォー・ライフ芦屋を 応援くださった全ての方へ

おかげ様でリレー・フォー・ライフ・ジャパン2008 in 芦屋は大成
功で終了することができました。
来場者は二日間延べ三千人を
超え、会場での寄付金も百万円を
超えました。

「参加して良かった」「来年もまた
来たい」とお声を頂戴できたこと

を、スタッフ一同、心より喜んでお
ります。

芦屋でのリレー・フォー・ライフは
昨年に続いて二回目となりますが
第一回目とは違った難しさもあり
本日に開催できるのかと危ぶまれ
る場面も多々ありました。こうし
た中、大会を開催でき、24時間とい
う長丁場を事故なく無事に終了で

きたのも、ご来場下さった皆様、地
元協力団体の方々、ボランティアの
方々、協賛・後援団体の皆さま、メデ
ィアの方々、全国からご声援下さっ
た皆さまのおかげです。本日にあり
がとうございました。

日本ではリレー・フォー・ライフが始
まって今年で三年目になります。
この間開催場所は一年目の一ヶ所

(つくば)、二年
目の二ヶ所(芦
屋、東京)、三年
目の六ヶ所(芦
屋、室蘭、新横
浜、徳島、高知、
大分)と着実に
広がりを見せつ
つあります。←

活動 報告書

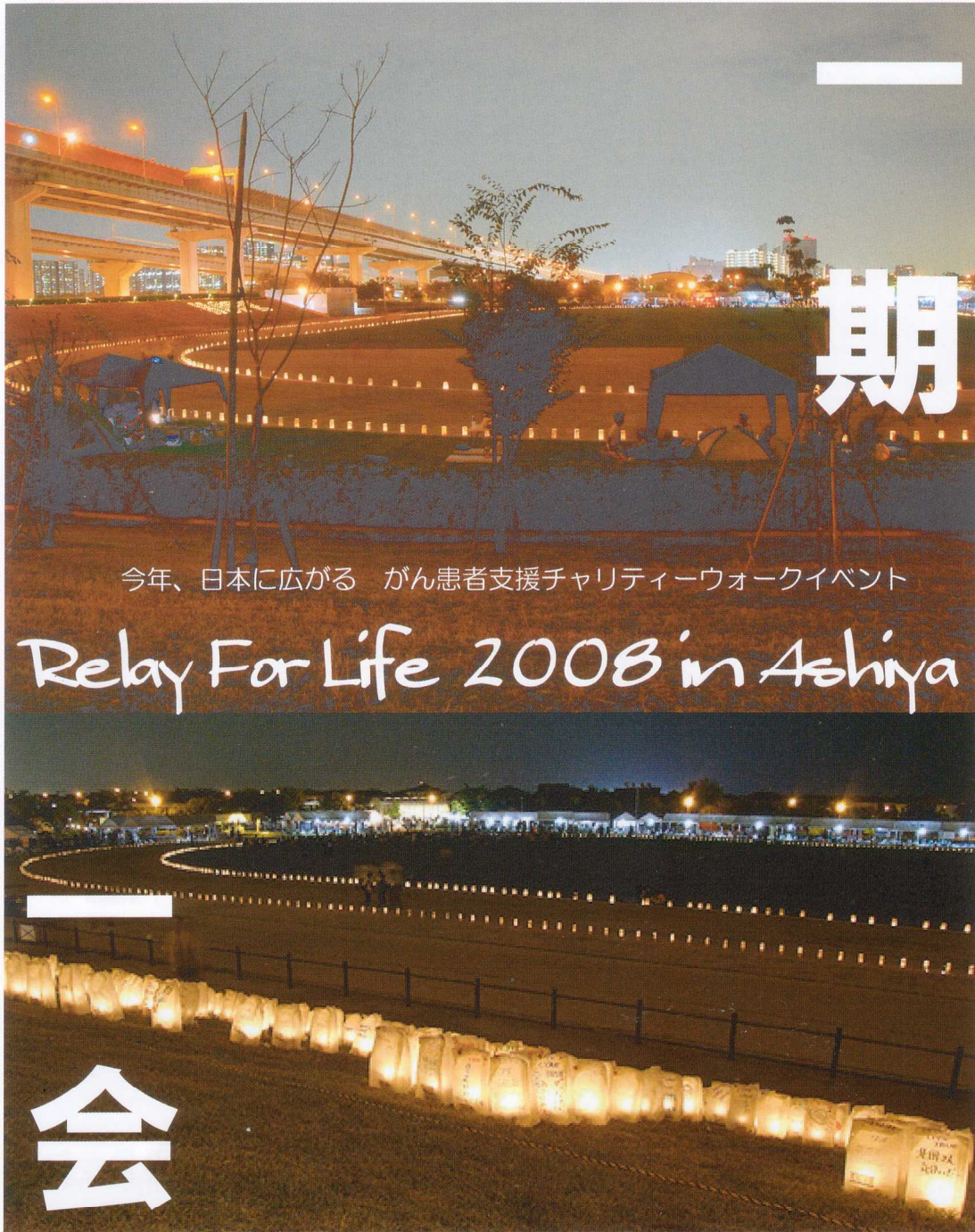
ご参加ご協力くださる方々も、
地元の方々、学生・企業ボランティ
アの方々へと広がりがつあり、リ
レー・フォー・ライフの理想である「
がん患者・家族・市民・医療従事者
行政・企業など多数の想いを一つ
にし、社会全体でがん向き合う
世の中を目指す」という方向に近
づくことあると感じております。

とは言え、日本人の三人に一人
ががんで亡くなる時代であるこ
とを思えば、まだまだ、がんに対
する取り組み課題も多く、リレー
フォー・ライフ自身ももっと身近
な存在になっていく必要を感じて
おります。

リレー・フォー・ライフは市民ボ
ランティアによるチャリティイベ
ントです。

応援下さる皆さんお一人お一
人が参加者であり、イベントを作
っていく力になります。今後とも
応援くださいますようお願いし
願ひ申し上げます。

リレー・フォー・ライフ
関西実行委員会
スタッフ一同



今年、日本に広がる がん患者支援チャリティーウォークイベント

Relay For Life 2008 in Ashiya

会

それは夏の終わりに再び芦屋に灯された 二年目の命の光...

リレー・フォー・ライフ関西実行委員会は、活動に賛同いただけた皆様からの協賛金によって運営されております。
来年以降の継続的な運営の為にも、より多くの皆様からのご寄付を受付しております。

<<お振込先>>郵便振替口座：00970-0-319325 リレーフォーライフ関西実行委員会（※振込手数料はご負担下さい。）
リレー・フォー・ライフ関西実行委員会：Tel. 0797-57-0007 ホームページ：<http://ashiya.rfl-jp.net/> -1-



つなげた命のリレー、つながる「がん撲滅」への願い

2008年9月13日、早朝に降った雨も、サバイバー達の熱気に退散したのである。二年目の「リレー・フォー・ライフ・ジャパン2008 in 芦屋」は、晴れ渡る空の下、今年も無事開幕の日を迎えた。昨年の日本初の24時間開催に引き続き、今年も熱き24時間が幕を開けた。

二年目の懐かしい顔との再会を喜び、昨年の報道を見てぜひ参加したいと心待ちにしていた新規の参加者等、総勢三千名が、続々と会場を訪れ、それぞれの交流の花があちらこちらで咲いていた。



2年目のサバイバーフラッグを掲げてサバイバーウォークがスタート。

二年目の想い 二年目の課題

リレー・フォー・ライフ 芦屋
実行委員長 大隅憲治

一回目のリレー・フォー・ライフ芦屋は、一回目とはまた違った難しさがあり、感動がある大会だった。昨年の芦屋大会の感動のフィナーレから、あつという間の一年だった。終了直後は、全国から沢山の感動のメッセージを頂き、スタッフも写真やビデオを見ては余韻に浸っていた。けれど時間が経つにつれ燃え尽き症候群のようになり、本当に継続できるのだろうか？と不安が大きくなっていった。

そんな僕達を後押し下さったのが、沢山の応援して下さいの方々だった。地元の方々は「リレー・フォー・ライフの意義は参加して初めて分かった。来年こそお手伝いしたい。」と仰って下さり、ボランティアの高校生も「ルミナリエのメッセージを読み、命の大切さを考えさせられた」という嬉しい声を寄せてくれた。そして何よりも全国の実行委員会の仲間達。同じ想いと悩みを共有し、励ましあひながら準備をすること、関西のメンバーも新たな勇気をもらうことができた。

そうして迎えた本番。去年に続いて参加下さった方の懐かしい顔。新しい方の期待に満ちた顔。去年と

は違う苦労があったからこそ、また違った感動が得られた。今年の芦屋大会の最大の特徴は、地元の方々やボランティアの方々、一般市民参加が増えたことだった。これまでがんに関心が低かった方々が、リレー・フォー・ライフを通じてそれぞれの立場から出来ることに取り組もうとして下さったことだった。リレー・フォー・ライフの理想は「がん患者・家族・市民・医療従事者・行政・企業など多数の想いを一つにし、社会全体でがん向き合う世の中を目指すこと」だ。全国でリレー・フォー・ライフがもっと身近な存在になり、がんで苦しまなくてもすむ世の中への一助になれば素晴らしいと思う。



24時間ウォークを終えたシンボルタスキを手に達成感と喜びを参加者達と分かち合う大隅氏(写真中央)

女性のがん、認知を広め 早期発見の為に検診を！

13日16時からステージでサバイバートークショーが開催された。

今年のテーマは「もっともっと知ってほしい女性のがん」。パネリストには「がんといいまじい」山下さん(写真左)、牧野さん、「RFL大分」坂下さん(写真右)、患者会「ぎんなん」辻さん、そしてアドバイザーとして自身もがん体験者である芦屋市立病院院長金山先生が登場。笑顔で前向きなトークに、ステージ前の参加者も熱心に耳を傾けていた。

トークショーの最後にはアグネス・チャンさん(写真中央)がスヘシャルゲストとして登場。「ほほえみ大使」として参加者への応援メッセージと共に自身の想いを込めて「この良き日」に熱唱。会場は感動の渦に包まれた。



RFLの為に作った「この良き日」を熱唱するアグネス

皆様から頂戴した寄付金を元に、大会運営経費を除き、財団法人日本対がん協会に1,870,374円を寄付させていただきました。財団法人日本対がん協会では、がん患者支援活動に活用させて頂く予定です。皆様のご厚意に、実行委員会スタッフ一同、心より感謝申し上げます。



大丈夫、あなたはひとりじゃない

ともすると闘病は孤独な闘いである。でも、「ここ」来れば同じ経験を経て、それでも笑顔で前向きに、精一杯命を楽しんでいる仲間達に会うことが出来る。病を隠す必要もない。

「来年また必ずここで会おう。一緒に歩こう。」その約束を果たす為に、必死に苦しい治療や不安と闘ってきた人達が、ここで再会できた喜びは深い。「諦めたらあかん。」サバイバー歴三十年のスタッフ明路さん(写真後姿)は涙ぐむ闘病仲間について優しく、そして力強くこの言葉を送る。

また、愛する人をがんてくした遺族達も「ここ」はやってくる。

取り残された悲しみ、寂しさ、治療法に対する後悔、もっとああしてあげればよかったという心残り……

…参加者の声…

- ◆亡くなった友人が、昨年参加していたRFL。去年友人が誘ってくれたRFLは、どんな所だろうと思って来てみました。重い感じのところかと思って、すごく決心して来たのに、なんだすごくみんな明るくてびっくり！（一般参加者）
- ◆1年前に告知され、抗がん剤治療が辛かった。娘のことも心配だった。余命宣告も受けていた。TVでRFLを知って、今年は絶対に参加しようと誓っていた。娘と参加できて、本当に感無量。（サバイバー女性）
- ◆TVで去年のRFLを知った。治療中でルミナリエの参加をしたけれど、今年は絶対に歩きたかった。アグネスさんと数分話ができ、励まされた。芸能人がこうしてがんの事を知ってもらう活動に参加していることで、より身近なものになって欲しい。（サバイバー女性）
- ◆自分と同世代の若いがん患者がいて、驚いた。皆さんが、普段どう不安を向き合っているのかも話したい。（サバイバー30代男性）
- ◆絵本読み聞かせの時間は“子供達に命の大切さを伝える”だけでなく、大人も子供も、聞く側も読む側も、絵本を読み合うことで“追悼”“励まし”“自分自身の気持ちの整理”などの意義深い時間を得ることができました。（スタッフ）
- ◆名古屋からわざわざ来られたサバイバー様がマッサージの最中に「こうしてRFL芦屋で開催されて有り難い。来れたことに感謝している。各地で出来れば良いコミュニケーションが出来ますね。」と語られたことに感動。（スタッフ）
- ◆フラッグテントでリボンをつけて頂く時、「あ、私ね乳がん！何色かしら〜」と大きな声で笑顔でおっしゃって、「普段はこんな風には言えないけど、ここでは言えるもんねー！」とあははと笑っていらした方が印象的でした。少し、胸の痛い想いでした。（スタッフ）



すべには乗り越えられないやせない想いが残り、時には自身の生きる気力さえ無くしてしまつ。そんな人も「ここ」は一人ではない。同じ悲しみを乗り越えた遺族達に心の内を明かすことで癒されたり、今現在、亡くなった家族と同じ病気で闘っている方と出会ったりする。同じ病で命を落としたり、悲しむ人をこれ以上増やしたくない…遺族の想いは明口のがん医療を支える柱となる。



エンティティテーブル(上)



今年からルミナリエタイムに始まった「エンティティテーブル」。がん撲滅への願いの象徴がステージに浮かび、詩が朗読された。ルミナリエの光の中、昨年の仲間や家族がたとえこの世を去ってしまったとしても、彼らの魂は再びこの地を訪れ、遺された私達の未来へ温かいエールを送ってくれてくれる。

ルミナリエに託す想い

芦屋でのルミナリエイベントも他のイベント(星空映画会)も合わせると、今回で四回目となった。約百名のボランティアスタッフが支えられ、総数約二千三百個のルミナリエ行灯が、夕刻から明朝までの間灯り続けた。特に夕刻の着火イベントでは、多くの地元小学生たちによる協力があつた為、スムーズにイベントが進行した。回を重ねるごとに、ルミナリエ行灯の意味が理解されてきているように感じる。しかし、まだまだ来場者数に対してルミナリエ参加者数(行灯を立てた人は、三分の一ほど)である。来場者全員参加によるルミナリエ実現に向けて次回も望みたい。

(ルミナリエ担当スタッフ)

